270. 各種ガソリンの毒性に関する実験的研究 第3報
流動接触分解法（Fluid Catalytic Cracking Process）により得られたガソリン（F.C.C. Gasoline）の毒性に関する血液学的並に生化学的研究
赤塚政志, 宮本隆, 田倉一, 萩原春男

271. 各種ガソリンの毒性に関する実験的研究 第4報
Hydroforming process により得られたガソリン（Hydroformate Gasoline）の毒性に関する血液学的並に生化学的研究
赤塚政志, 田倉一, 宮本隆, 鈴木猛, 宮本隆, 宮崎正, 高橋国男, 徳永益美恵

接触悪質の一方の流動接触分解法（Fluid Catalytic Cracking Process）により得られたガソリン（F.C.C. Gasoline）の毒性について、油圧より溜製して得られた直溜ガソリン（Straight run Gasoline）と毒性が比較的判明している Benzol（以下 Bl）を対照として、比較検討した。実験動物として、成長及び幼若雄性家兎を用い、流動接触分解法として、圧圧注射を行なった。注射量は、急性中毒試験では毎日 1cc/kg、慢性中毒試験では1週間直ぐ毎週内注射とした。

1）急性中毒試験における生存日数は Bl 最も短く、Sr と Fcc の間でとくに相違は認められない。

2）慢性中毒試験における体重の減少率は成長家兎では Fcc と Bl が同程度で、Sr これにつき、幼若家兎では Sr と Bl が同程度で、Fcc これに比べている。

3）血液所見に就いての貧血の程度は、急性中毒では Bl は生存日数短くため判然とせずがガソリン試験群では Fcc やSR で強く、慢性中毒では Sr で強く、Fcc、Bl の順である。網赤血球数は急性、慢性ともに Fcc、Sr が高まったのに反して、Bl では急性中毒では一旦増加して後、激減、慢性中毒では原状またはそれ以下にとどまった。白血球数は Sr、Fcc では増加し、Bl では減少、甲なのでおもな変動は好中球とリンパ球であった。

4）尿所見では急性中毒で各群にポルフィリンの出現を見たが、程度は Sr に強く、Fcc、Bl の順である。

5）抗血の抗血は急性、慢性ともに正常範囲に終始した。

6）6週間にわたる試料供給後の自然恢復状況では、体重の原因に復する時間は Bl、Sr、Fcc の順であるが試料供給中の最低体重からの増加率は Sr、Fcc、Bl の順であった。

7）貧血の恢復は Sr、Fcc、Bl の順で、網赤血球数は Bl は最初より変化少なく減少傾向、Sr、Fcc はほとんど同じく原状に復した。白血球数の減少または増加より原因には Sr、Bl、Fcc の順であった。

以上の結果より見て、流動接触分解法により得られたガソリンの毒性は Benzol に劣り、その取扱いには直溜ガソリンと同程度の衛生学上の注意を払うべきものと思われる。